路上生活者の個人史

第11回

竹中尚文

長崎　恵龍　氏(仮名)1958年生

生まれは徳島県です。昭和33年の生まれですから、現在65歳です。家族は五人でした。祖父と両親、私が長男で妹と弟がいました。父親の仕事ですか？ウチは特殊でした。父親の仕事というより、ウチの仕事といった感じですし、仕事と表現しにくいのです。宗教関係ということにしておいてください。

小学校と中学校は地元で行きました。高校からは教団が持つ学校に入学しました。家から離れて寮生活でした。高校も大学も宗教に関係なく一般の人たちもたくさん通ってきていました。私のような宗教関係で入学してきた生徒の多くは寮生活でした。町の人たちも私たちの学校に温かい目で見ていてくれましたので、心地よい学生生活でしたよ。とてもいい学生生活を送れたと思っています。

大学を卒業して実家に帰りました。父親はまだまだ元気でしたから、父親の助手のような立場でした。父親は真面目な人で、私は敬愛していました。それがいつの頃か、父親の上司のような立場の人とそりが合わなくなりました。教団という組織で父親の上位の人がいたのです。その人は、父親より若いのですが父親に高圧的な態度を示していました。父親が年を重ねるにつれて私の責任も次第に大きくなりました。私が五十代になると私が父親に代わって主な立場になりました。そうすると私に対する上司の圧力がドンド

ンと強まりました。そこには私の父親に対する不満も込められていました。今でいうパワハラと言ってもいいかもしれません。

私たちの仕事は具体的な成果を出すわけではありません。生産高を示したり、営業成績を示したりすることはありません。心のつながりを重んずるのですから、そこでいじめのようなことを受けると本当につらいのです。信頼して心がつながっていてこそ成り立つ世界ですから、つらかったです。そんな中で、私の心がくじけたのです。どうしようもありませんでした。実家を出て、大阪に来ました。実家ですか？今は弟が守ってくれています。妹は嫁ぎましたので、弟は一人で実家を守ってくれています。弟はよく頑張って、実家を守ってくれていると思いますし、弟には感謝しています。

私は六十歳を前に大阪に出てきて、とにかくお金を稼がないといけないので日雇いの仕事をしました。まだ若かったので肉体労働を続けることができました。寝るのはインターネットカフェでした。六十歳を越えるとそんなに続けて仕事があるわけでもないので、今は野宿生活です。まったくの野宿生活です。ブルーシートやテントも持っていないのです。そのような物を持つと、保管場所が必要になるのです。それがなかなか高いのです。これからだんだん寒くなります。冬に向けて何らかの手を考えねばと思っているのです。

長崎氏に聞き取りをしたのは、昨秋でした。その頃の長崎氏の表情は硬かったように思いました。何か思い詰めたような顔でした。この半年ほどの間に、ホームレス生活に慣れてきたのか、仲間ができてきました。彼は人々のネットワークを作るのがとても上手です。彼が作る人の輪はとても温かく優しい関係です。そんな生活を続けるうちに、彼の表情がずいぶんと穏やかになってきました。彼は家を失ったけれど、宗教家としての働きを取り戻したように思います。